

2025年11月23日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教61「願いを超える御業」

イザヤ40:27～31、ヨハネ11:17～27

第11章にはマルタとマリア、そしてその兄弟のラザロが登場してきます。5節を見ると「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」とあります。この家族との親しい交わりがあったのでしょう。ところがある日ラザロが病気で死んでしまいます。マルタとマリアはラザロが死ぬ前にイエスさまのところに人をやって「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」（3節）と伝えていました。そこにはイエスさまに早く来てほしい、そしてラザロを癒してほしいという切なる願いが込められていました。しかしイエスさまはすぐには行かれず、ようやく到着した時は、ラザロはすでに死んでおり、墓に葬られて四日も経っていました。イエスさまを迎えに出たマルタは自分の思いをぶつけています。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」（21節）と。マリアに至っては腹を立てているのか、イエスさまが来られても迎えには行かず、家の中に座ったままでした。

どうしてこんなにもイエスさまはのんびりしていたのでしょうか。本当にこの兄弟たちを愛しておられたなら一刻も早く駆けつけるべきだし、マルタとマリアの願いを聞いてあげるべきではなかったか。誰もがそう考えるでしょう。けれどもイエスさまはそうならなかった。どうしてか。イエスさまは「神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」（4節）とおっしゃっています。彼らのためではない。神さまの栄光のため、ご自身が栄光をお受けになられるために、あえて彼らの願い通りにはならなかったと読むこともできます。それは彼らを愛していないということではなくて、愛するがゆえに、彼らの願いではなく、その願い以上のことをイエスさまは行われたということではないでしょうか。

神さまの救いは、単にわたしたちの願いを満たすものではないことをわたしたちはわきまえておく必要があります。自分の願いが満たされることが救いと考えている人はとても多いのです。けれども神さまの思いはわたしたちの思いを超えています。イザヤ書に「天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている」（イザヤ55:9）とある通りです。わたしの願いを叶えることが神さまの救いと考えたら、いつの間にか、わたしたちは神さまを自分の願いを叶えてくれる都合の良い存在に仕立て上げてしまうかもしれません。もし仮にラザロの病床にイエスさまが間に合ったとしましょう。そして願い通りラザロをお癒しになられたとしても、その時は病気が治ってよかったねとなるかもしれません。でもそれでおしまいです。その先がないのです。ラザロもこの姉妹たちもいずれまた病気になるでしょうし、やがて死を迎えるのです。

今日のところでイエスさまはマルタに言われました。「あなたの兄弟は復活する」（23節）さらに「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」（25節）イエスさまは単に病気が治ること以上のこと、よみがえり、死んでもなお生きるという死の先の命へ彼らを導こうとされています。そのような救いを信じる信仰を始めてくださる。今日のところで最後にマルタは信仰告白をいたします。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」（27節）この信仰を引き出させたのはイエスさまです。もしイエスさまが姉妹たちの願いを聞かれ、ラザロの病気を癒されたら、この信仰告白はなかったでしょう。その場限りの目先の救いより、死の先へと続く命を信じる信仰が起こされ、

神さまの栄光が現されることの方が、はるかにわたしたちにとって喜びであり希望ではないでしょうか。そこに神さまの御心があります。

墓に葬られて四日は絶望的な状況です。ラザロは完全に死にました。多くの人々が姉妹たちを慰めに来ていましたが、それは絶望の中に、死の中に閉じ込められている弔問の客人です。葬儀に出席しますとわたしたちは「お悔やみ申し上げます」とか「大変でしたね」としか言えないのです。せいぜい遺族の背中をさすってあげるくらいしかできない。でも信仰は、その先の命へとわたしたちを導くのです。イエスさまは弔問の客人として来られたのではありません。「わたしは彼を起こしに行く」(11節)とおっしゃった。イエスさまはラザロを死の支配から呼び起こしに来られました。死の支配から連れ戻しに来られたと言ってもよい。それはわたしたちの願いや考えや常識をはるかに超えた救いです。そしてそれを手にすることができる人は、ただイエスさまを信じる人だけであります。

来週からアドヴェント待降節が始まります。クリスマス、神さまの独り子イエスさまの到来を待ち望む日々を過ごします。イエスさまは何のためにこの世に来られたのか。それはわたしたちを死の中から取り返すためです。罪と死の中に諦め、安穩としていたわたしたちを起こしに来られるのです。そのためにイエスさまは貧しい馬小屋で生まれられ、最後は十字架で死んでくださいました。本当に死の中にまで入って来てくださった。そして死に打ち勝ち三日目によみがえられた。そこからわたしたちを命の中へと連れ戻してくださいます。復活であり、命であるイエスさまだけがわたしたちを死の先の命へと誘うことができますのであります。その救いを信じて洗礼を受け、イエスさまに結ばれ、イエスさまと共にわたしたちもよみがえりの命へ向かいます。その救いを心に留めながらクリスマスを迎えていきたいものです。

先週は婦人会がありました。ホセア書の最後のところを読みました。わたしが印象深く思いましたのは、発表された方がゴッホの「糸杉」の話をしたことです。ホセア書に次のようにあります。「わたしは命に満ちた糸杉。あなたはわたしによって実を結ぶ」(14:9) ゴッホは牧師の家庭に生まれました。牧師を目指して一生懸命勉強するのですがなかなか合格できません。何をやっても上手くいかないゴッホは、やがて「お前などいい方がよい」「生きている価値はない」という闇の声に悩まされるようになります。精神を病むのです。でもその闇の声を振り払うように彼は画家の道を歩みます。けれども時々常軌を逸した行動に出るゴッホを周囲の人々はなかなか理解できず、孤独だったゴッホは人生を悲観してその生涯を自ら閉じてしまいます。ゴッホは「糸杉」の絵を何枚も残しています。「糸杉」はヨーロッパでは墓地に植えられました。それは天に向かってまっすぐに伸びる姿に再生や復活をイメージするからだと言われます。ゴッホ自身、信仰や命に強い憧れがあったに違いありません。そう考えると「糸杉」は彼の信仰告白のように思えてなりません。「糸杉」の絵を描きながら、彼は心を高く上げ、よみがえりの命を求めていたのでしょう。なかなか思い通りにいかない人生です。ゴッホのように人生に悲観的になることもあるでしょう。けれども、わたしの願いをはるかに超えて天に向かってわたしたちの命を導いてくださる神さまの救いにこそ望みを置きたいのです。

天の父よ。あなたはわたしたちの思いをはるかに超えて救いをもたらしてくださいます。その御心に信頼することができますように。よみがえりであり、命である主に捕らえられていることの幸いに生きることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。